
虚構ヒズミラクル

雛祭パペ彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構ヒズミラクル

【Nコード】

N1767B

【作者名】

雛祭パペ彦

【あらすじ】

この小説は、400字詰め原稿用紙107枚ほどの小説です。長いです。

ヒズミラクル その1

水を汲み終えると、男はペットボトルの蓋を閉めた。容量は386ml。パッケージにそう印字してあるのだから間違いない。

花崗岩を加工して造られた水飲み場には、笑顔を浮かべた子供ゾウのイラストが描かれている。ゾウの長い鼻と蛇口の形状とを関連付けたデザインなのだろう。それを単なるこじつけといってしまうば、元も子もなくなってしまふ。

と、そんなことを考えているうちに、男の姿が水飲み場から消えていた。つまらない事を考えているあいだに、見失ってしまったのだ。

男の姿を追うために、私は、辺りを見渡す。

古ぼけた遊具が点在しているここは小さな公園だった。こうしている間にも、あの男はどんどん遠くへ行ってしまうだろう。しかしここには水飲み場の他に、錆ついたジャングルジムや、滑りの悪そうなすべり台や、犬猫の公衆便所を兼ねた砂場があった。

ペットボトルの男、性別が男性のペットボトルではなく、ペットボトルを手に持っている男性は、すでに公園を出て大通りに向かって歩いていった。あたりは住宅街で、多くの窓にはカーテンが閉じて掛けられている。人影はなく車の往来もない。唯一、遠くのほうでバイクのエンジンが間歇的な唸りをあげていた。

空を薄闇が覆っていることから、いまが明け方が暮れ時のどちらなのかもわからない。バイクの音は新聞配達員によるものかもしれない。しかし朝刊配達なのか、夕刊配達なのかはわからない。公園に据えつけられた背の高い丸時計が4時17分を示している。とはいえ、これだけでは現在が午前4時17分なのか午後4時17分なのかは断定できない。時計が、24進法のデジタル表示によるもの

であれば一目瞭然なのだが、行政の怠慢は、こういう些細なところに現れるものだ。

ところで、一度ポ力をやってしまった私が、二度と男を見失わないようにするには、どうすればよいだろうか。そうだ、できるだけ近くにいれば良いのだ。並んで歩けばいい。

ということ、私は、男と並んで歩くことにした。

ペットボトルを片手に歩きながら、男はたいへんな悪臭を振りまいていた。甘くもあり酸っぱくもあり苦くもあり、腋臭の匂いであり、饅えた匂いだった。ヒゲも生え放題で、安い紅茶のような肌の色をしていた。これ以上ないというくらいの日焼けをしていることから、ホームレスであることは疑いようがない。しかし服装に目を移せば白いタキシードで盛装しているため、必ずしも住所不定の輩とはいえなかった。

もしかすると、パーティーの帰り道なのかもしれない。私はこのペットボトルを持った男のことを何も知らないのです、外見から推測するしかなかった。

たとえば男が着ているタキシードは白色なので、仮に結婚式ならばそれは新郎の服装だ。喜びのあまり昨夜は新婦に友人知人同僚たちを交えてドンチャン騒ぎをしたのかもしれない。しかし、それにしては酒の匂いがせず、饅えた匂いばかりが男のまわりを漂っていた。それに鼻から下をおおう無精ヒゲなどは、とても一夜で成したものだとは思えない。私が想像するに、実は結婚式は10日前に催されたのであり、その夜騒いだあと興奮しすぎた男は一種のトランス状態に陥ったため、例えば「うひょおおうい」などと叫びながらわけもわからずホテルを飛び出したものの、気がついてみると知らぬ土地の公園のベンチで目を覚まし、どうやら喉が渴いていたので水飲み場で渴きを癒してから、ついでに転がっていた空っぽのペットボトルに水を汲んだ、という経緯を踏まえたうえで現在に至

るのかもしれない。伸び放題のヒゲも、饅えた体臭も、10日間ほどトランスしていたというなら説明がつく。あくまでも勝手に自由気ままな想像だが、とりあえずそう結論づけたあと、私は、隣りに誰もいないことに気付いた。

並んで歩いていたにもかかわらず、また見失ってしまったのだ。

私があわてて辺りを見渡すと、さいわい、すぐに白いタキシード姿を見つけることができた。なんと、ペットボトルの男は、私の数メートル後ろを歩いていたのだ。どうやら私は、知らないうちに男のことを追い越してしまったらしい。

もう二度と男の姿を見失わないためには、私は自分の考えに没頭する行為。いわば「よそ見」を控えなければならない。内省するなどもつてのほかだ。私は、私の役割を果たさなければならない。

というわけで私は、進路に立ち塞がる形でもって男と顔を突き合わせて歩くことにした。これで二度と男の姿を見失うことはないだろう。

あいかわらず、明け方なのが暮れ時なのかハッキリしない暗い空の下、ペットボトル片手のタキシード男は私の目の前を歩いている。アスファルトの舗道をゆっくりとした足取りで進んでいた。

周りに通行人の気配は無かった。時折、4トントラックや小型のコンテナトラックが傍を通り過ぎていったが、そんなものに気を取られることなく、なるべく私は、目の前にいる男のことだけを考えるようにしていた。

ところで、このホームレスと思しき男が白のタキシードを着ているという不可解について、いくら考えても仕方がなかった。目の前にいる大丈夫。そもそも、この男が何者であろうと私には関係がない。まだ目の前にいる大丈夫。偶然、たまたま、ひょんなことから出会ったのがこの男だったのであり、これからずっとこの男に尾いて歩くわけではなかった。まだ目の前にいる大丈夫。だが、そうし

て出会い、私の目の前にいる以上は、私はこの男のことについて何かを考え、そして語らなければならなかった。まだ目の前にいる大丈夫。

べつに尾行しているわけではない。私は探偵ではないし、諜報組織の一員でもないからだ。

それを証明するために、私は自動ドアをくぐり、蛍光灯が目映い店内に足を踏み入れた。

まず目に入ったのは、堆く積み上げられた扁平なカゴだった。灰色のものは10段ほど積まれており、これがもし跳び箱であれば小学生が跳び越えるのは難しいだろう。そのほかの白色や青色のカゴは、3箇所にそれぞれ低く積んである。言うまでもなく、これらは跳び箱ではない。

その青年は、どの青年かということはこのあと説明するが、なにが携帯電話をひとまわり大きくしたような機器を片手に、カゴの中から次々と品物を取り出していた。品物とは、包装された弁当や惣菜パンの類であり、それらにいちいち機器を押し当てては、そばにある棚に並べていく。押し当てるたびに「ピッ」という電子音が鳴る。おそらくこの青年は従業員で、入荷した商品を並べているのだ。緑色と黄色を組み合わせたデザインの制服を着ていることから見ても間違いない。ここは大通り沿いにあるコンビニエンスストアだった。

私は店内を見渡したが、青年のほかに人の姿はなかった。にもかかわらず、さきほどから人の声するのはなぜだろうか。若い女が得意げな調子で喋っているのだ。

「未成年者の飲酒・喫煙・強盗は法律により禁じられています。当店でタバコ・アルコール類をご購入する場合、身分証の提示をしていただく場合がありますので、どうぞご了承ください」

その女の声は、居丈高な調子でどこからともなく聞こえてきた。二度ほど同じ文言を繰り返したあと、今度は歌詞のないBGMが聞こえてきた。文言の内容はコンビニ運営に関わるものだったので、間違いなく女はこの店の従業員なのだろう。きつとどこかに身を潜めているはずだった。

ヒズミラクル その2

青年は、あいかわらず棚に並べる作業を続けていた。さきほどの声の主は、いつこうに姿をあらわさない。それでも、青年は平気な顔で弁当や惣菜パンを手際よく並べていた。よく整った顔立ちは怒りに歪むこともなく、手伝いに来ない怠惰な女性従業員のことなど露ほども気にしていないように見えた。

時計は4時33分を示している。表示が長針と短針だけのものなので、それだけでは午前なのか午後なのかはわからない。しかし、レジカウンターに積まれている、荷解きがされていない届けられたばかりの新聞紙の束は、5紙ともに「朝刊」と印刷されているので、現在は「午前」4時33分に違いなかった。朝刊の日付は、すべて18月46日（炎）となっていた。

あの青年がこのコンビニの従業員である以上、すこしぐらい目を離れたところで、この狭い店内からいなくなることはないだろうから、私は安心して新聞に目を通すことができる。これらを発行している新聞社が、それぞれ左右どちらに傾いているのか、私には見当もつかない。もちろん、本社ビルの地盤沈下による傾きという意味ではない。

ある新聞の第一面では、これまで謎とされていた「しゃっくりのメカニズム」が完全解明されたことを大きく報じていた。呼吸器医学と神経病理学の共同研究チームが33年の歳月をかけて解明したようだ。お天気欄に目を移せば、どうやら今日の午前中から雨が降るらしい。予報は100%となっていた。つぎに政治欄と社会欄をすつとばして、文化欄には連載小説が掲載されている。『ごろつちえぱふぱふ』という奇妙な題の時代小説だった。ちょうど、男の町人と女の武家が入水心中をするシーンが描かれている。最後に、テレビ欄の裏側にある4コマ漫画『物乞いサツちゃん』を3度繰り返して読んでから、新聞を元に戻した。どうしても4コマ目のオチが

よくわからなかった。

青年は、引き続き作業を行っていた。灰色のカゴの高さは半分に減っている。空っぽになったカゴは、別の場所によけてあった。

それにしても、さきほどの居丈高な女は、まだ手伝いに出て来ないつもりなのだろうか。いずれにしろ、作業はまだまだ終わらないだろう。青年には気の毒だが、私は雑誌を立ち読みすることにした。雑誌コーナーは道路沿いに面していて、ウィンドウガラスを通して外が見渡せる。ときおり、運送トラックが通り過ぎて、道路向こうには大きなレンタルビデオ店が構えていた。営業時間は、年中無休で10時から24時と説明されており、今はまだ閉まっている。このことから、やはり今は早朝なのだ。とすれば、そろそろ空が白みはじめても良い頃なのだが、午前中から雨が降るせいなのか、薄暗いままだった。

4段ほどのマガジンラックには、さまざまな雑誌が陳列されていた。しかし、そのどれもがビニール紐によって十字に縛られている。おそらく、たぶん、私が思うにこれは利用客が持ち運びやすいようにという店側の配慮なのだろう。紐が交わるところを指でつまむようにして持てば、少ない労力でレジまで運ぶことができる。

ボタン

という音が私の耳に入った。雑誌コーナーの突き当たりにあるドアが閉まったようだ。店内を見渡すと、灰色カゴの周辺に青年の姿はなかった。店内に客は1人もいなかったのだから、つまりあのドアの向こうにいるのは青年であり、まさに青年はスボンの前ファスナーを下ろしているところだった。

和式便器がある一畳ほどの空間には5センチ四方の緑色のタイルが敷き詰められている。そして、転び出した青年の陰茎の亀頭の最先端からは濃い琥珀色の液体がほとばしり、和式便器内の水溜りがジヨボジヨボと威勢のよい音をたてて泡立った。青年の短く切りそ

ろえられた黒髪からは蒸れた汗の匂いがしたが、それよりもトイレ芳香剤の匂いが強く、とっぜん追い討ちをかけるように甘じょっぱいような尿の臭いが漂いはじめたところで青年は水を流した。

それから青年は右手でトイレのドアを押し開き、さらに店内へのドアを抜けると、レジカウンターの中に1人の男が立っていた。

その男は、肩幅が広く肥満体で、紺色のジャージを着ていた。この店の制服を着ていないことから見て店員ではなさそうだし、すでにカウンター内に侵入していることから客だとは思えない。何者だろうか。

単純に考えればコンビニ強「おつかれー」盗かと思ったが、どうやら違「あ、おzारीす」ったようだ。挨拶の言葉を正しく発音したのはレジ内の肥満体ジャージの方だった。

「今日、ちよつと多いね」

「あー、きのう発chuし過ぎたcome on」

「いいよ気にしなくても。でも雨降るんだよなあ」

「えー、本topcar」

「しかも、予報は100%オレンジジュース果肉入り」

「うわ、suvいつすよ袖は」

「さぶいつて言うなよ」

「んじゃ、続きやdeますunday」

「そうだね。僕も手伝うから」

舌足らずな青年の口元をよく見ると、門歯の上下3本が無かった。目鼻立ちは整っているのに、せつかくの男前が台無しだった。青年の過去に、いったい何があったというのだろうか。

さっそく肥満体の男がレジカウンターから出て、弁当などを棚に並べはじめ。青年が持っている電子機器と同じものを携えて、手馴れた様子だった。そばで作業を行っている青年と比べてみれば、どうやら肥満体の方が上級者のようだ。2人は、菓子パンや弁当の棚が並ぶし字通路で向かい合っている。

「最近、ちゃんと大学行ってんのか」

「あー、うー、ten長ひでー」

ten長と呼ばれた肥満体は、うすら笑いを浮かべながら、すでに灰色カゴを1つ空にしていた。口を動かしながらも、その3倍の速度で作業を進めている。肥満体ことten長の髪は中央分けのサラサラヘアーなのだが、頭頂部からは地肌が透けて見えた。早くものり塩風味の汗の臭いがその巨体から漂いはじめている。

そのとき、4時52分から53分になる瞬間を、私は見た。つまり長針がわずかにブレる瞬間を目撃したのだが、まあそんなことはどうでもよい。ten長が私にひと足おくれて、店内の壁掛け時計に目をやった。

「弁当のカゴ終わったら、もう上がってもいいから」

「hereい」

聞き取りにくい返事をしたあと、唇を堅く結び表情をまったく変えないまま、歯抜けの青年は、残り2個の弁当を棚に並べ終えた。

これで10段あった灰色のカゴはすべて空になった。残るはten長の周りにある青や白色のカゴだけだ。

「じゃ、おふくろさまでした」

確かにそう聞こえた。

「うん、おつかれー」

作業に向かいながら返事をした肥満体は、笑みこそ浮かべていたものの、そのなかに青年の言葉に対するおかしみは含まれていなかった。おそらく、ten長は青年が用いる歯抜け語を完全にマスターしているのだ。青年がここに勤めはじめてからだいぶ経っていることが推測できる。1年くらいだろうか。

青年が向かった先は、カウンター奥にある4畳ほどの小部屋だった。制服を脱ぎながら、いったんはタイムカードを手にとったが、すぐに戻した。タイムスタンプ機の時計が4時59分を示していることと何か関連があるのかもしれない。いずれにしても、この店のルールを私は知らない。それから、ふたたび青年がタイムカードを手に取ったあと機械に通すと「極楽純太」と記されたカードに退勤

時間が刻まれた。

極楽青年もしくは純太青年は、脱いだ制服をロッカーに納めると、片手で携帯電話を操作し始めた。切れ長の目が、ずっと小さな画面を見つめている。椅子に腰掛けて、縦横無尽に文字を入力していた。そばでは、薄闇のなかでぼおつとPCディスプレイが発光している。他にも四つの小さなテレビモニターが積んであり、そこには店内の断片的な映像があった。おそらく防犯カメラによるものだろう。

この窓のない物置じみた部屋は、従業員たちの休憩室を兼ねているらしい。室内灯をつければよいと思うが、青年はいつこうに、発光する携帯電話の画面から顔をあげる素振りを見せない。

その足元には、買い物カゴが2つ置いてある。どちらも山盛りいっぱいになり、惣菜パン他が放りこんであつた。見るからに無造作で、サンドイッチの上にくつも牛乳パックが置かれていて、具のエグベーストがパンとパンの間からパンパンに押し出されて見映えが悪い。フルーツと生クリームがデコレートされたプリン製品にいたっては、天地が逆さまに放り込んであつた。

しかし、特筆すべきはその粗雑な扱いよりも量だつた。カゴ大盛り2杯分の食べ物&飲み物、すなわち、おにぎり、弁当、焼そば、惣菜パン、菓子パン、ホワイトグラタン、パック入り鶏の唐揚げ、ちくわ、果物ゼリー、プリン、1リットル牛乳パック、フルーツヨーグルト3連などのオードブルからメインディッシュ、そしてデザートに至るまでの膨大なフルコースメニューを、この青年は一体どうしようというのだろうか。決まっている。買い物カゴに入れてあるのだから、当然購入するに決まっている。購入するつもりのないものを買う物カゴに入れるはずがない。ましてや、本来店頭に出しておくべきものを長いあいだ常温の場所に放置しておいたわけであり、いまさら元の棚に戻すわけにはいかないだろう。問題は、なぜこの青年が到底ひとりでは食べきれないであろうカゴ大盛り2杯分の食品類を購入する必要があるのかということだが、これは宿無しじみた男が白いタキシードを着ていたことよりも難解を極める問

題といってもよい。

ヒズミラクル その3

まず考えられるのは、青年が大家族の一員であるという仮説だ。

現在、午前5時3分。青年が帰宅する頃には、世間の人々が目覚めはじめ、朝食を摂り始める時間帯が訪れる。あらためてカゴの身を見ると、おにぎりやパンなど主食にあたる製品が多い。これはつまり、青年が属するであろうと仮定される大家族の朝食の大部分が、コンビニ食によって賄われていることが推測できる。もしや、青年の両親もしくは母親は急逝しているのではないか。食事を用意する者が不在であるから、腹をすかせた兄弟姉妹のために、大家族の一員たる青年はカゴ大盛り2杯分ものコンビニ食を購入する必要があるのではないか。いや、この青年に兄や姉がいるならばその者たちが用意するだろう。ということつまり、自分では炊事をするなどできない幼い弟妹たちを抱えているというなんとも不幸な話、はもう1つの可能性として、実はこの青年が大勢の哀れな野良猫たちをひそかに養っているという、いかにも6才児の読み物めいたお涙頂戴ストーリーが考えられるが、と、ここまで考えを巡らせたあと、私は重大な過ちを犯していることに気がつき、慌てて我に返ったときには青年の姿が消えていた。

PCディスプレイと防犯モニタだけがぼおつと発光しており、4畳ほどの室内には誰の姿もなかった。

またしても、私は見失ってしまったのだ。
言うまでもなく「よそ見」をしたせいだった。

空っぽの休憩室を出ると、白色のカゴをひとつだけ残してten長は作業を続けていた。遠く離れていても頭頂部の薄らハゲが確認できる件については置くとして、青年はどこへ行ってしまったのか。

なに、慌てる必要はないのだ。落ち着け、いや、落ち着くまでもなかった。あの歯抜けの青年がどこへ行こうが水虫だろうが性病だろうが私には関係ない。私は、ただ目の前にあるものについてのみ語っていればよいのだ。私は私の役割を果たせばよい。

ということ、いま目の前にいるのは、私の目の前にいるのはten長こと肥満体、肥満体ことten長だった。濃紺のジャージに包まれた醜く大きな尻を突き出してしゃがんでいる。機器を片手にテキパキと菓子パンを棚に並べていた。

実をいうと、ten長はメガネをかけている。ノンフレームタイプのものだ。この重要な特徴を今さらのように付け加えたのは、私が語り忘れていたからだ。はじめてten長を目にしたときから、メガネをかけている肥満の中年男性だということはわかっていたのだが、すっかり言及し損ねたのだ。断じて、思いつきや気まぐれによる後付けの設定ではない。私はそんなことはしないし、私の役割上、そんなことはできないのだ。肥満体のten長は、はじめからノンフレームのメガネをかけていた。それは揺るぎようのない事実だった。

丸鼻の下に浮きでた汗をジャージの袖でぬぐいながら、ten長は最後の菓子パン　クリームメロンパン4つを棚に収め終えた。それからすぐに立ち上がると、空になった青・白・灰色のカゴを、キャスター台に積み上げていく。そしていちばん背の高い灰色カゴの便を、おそろおそろ床に滑らせる。店の入り口まで行けば自動ドアが左右にわかれ、店内のマットと店外のマットの間にある溝に気をつけながら、カゴが崩れ落ちないように十分注意を払いつつ、およそ10メートル弱ある駐車場を横切ったあと、店舗側面にある力ゴ置き場に納めた。

空は、くすんだ雲に覆われながらも少しずつ明るさを増していた、などという気象予報士の前口上めいた説明はさておき、雑誌コーナーのウィンドウ越しに時計を見ると、5時14分を指していた。運輸トラックに混じり、一般乗用車もちらほらと道路に現れ始めてい

る。

落ちていた自店の買い物袋を拾いながらten長は店内に戻ると、今度は青力ゴの便を運びはじめた。どうやら、このあと何度と同じ作業が繰り返されるのは明白であり、私はten長について歩くのを止め、とりあえず店内で待機する。

「未成年者の飲酒・喫煙・強盗は法律により禁じられ」

急にBGMが止み、ふたたびあの女従業員の声がどこからともなく聞こえてきた。相変わらず人を上から見下したような口調であり、私は咄嗟に休憩室へ向かった。女が隠れているとすれば、あの部屋以外にないと思うのだ。

「バコ・アルコール類をご購」

ふたたび、私は物置じみた休憩室に足を踏み入れる。

PCディスプレイが放つわずかな光では隅々まで見渡せない。室内灯のスイッチを探したのち、それをすぐに見つけたのだが、私にはどうすることもできない。OFFになっているものをONにすればよいのだが、それは私の役割ではない。ただOFFになっている、と言うことしかできなかった。

「みうん証のてい示をいていたあく場あいなりますおで」

ドア1枚を隔てているため、あの女従業員の声がかくぐもって聞こえる。休憩室の中は静かだ。もしこの部屋のどこかに隠れているとすれば、声くらいは漏れ聞こえてくるはずだが、誰かが潜んでいる気配すらない。と、すれば、残るは天井裏しかないだろうと思い、私は天井を見上げた。しかし、どこにも継ぎ目は見当たらない。そもそも天井裏などあるのだろうか。この店の外観はどんなだったか

ドアが開き、休憩室に光が差し込んだ。

ten長だった。周りに聞こえるほどの鼻息を漏らしている。紺色のジャージ姿で、ドアをくぐる時に頭を屈めたのだから180センチ以上はあるのだろう。いちおう言っておくが、横幅ではなく身長の話をしている。そのten長が壁に手を這わせると、ようやく室内が蛍光灯の明りによって照らし出された。あっという間に、の

り塩風味が部屋のなかに充満する。いつのまにかタバスコのような酸味も加わっていた。

鼻息とも溜め息ともつかないような呼吸を繰り返しながら、ten長はPCそばの椅子に腰掛ける。椅子は、キヤスターが付いているナイロン張りのもので、ten長の全体重が加わった瞬間、生きた鶏を3匹まとめてツブした時のような悲鳴をあげた。

太っているためなのか足を組むことができず、妙に行儀よく2本の脚を揃えたままten長はくつろぐ。そばにあったタオルに手を伸ばしては顔や首まわりの汗を拭いていた。それから腕時計を眺め、おもむろに立ち上がるかと思いきや、ten長は足元にあった大盛りのカゴに手を突っ込んだ。おにぎりと惣菜パンが驚づかみにされる。

このとき私は、青年の歯抜け面を思い浮かべたが、何の躊躇もなく包装を破りはじめるten長を目の前にして、ようやく合点があった。

件の大盛りカゴ2杯は、すべてten長の朝食だったのだ。

それを証明するかのように、焼そばとコロッケが挟まれていた惣菜パンを、ten長はたったの4口で平らげてしまった。そして新たに食卓に乗せられた牛乳1リットルパックを直飲みしながら、フガフガムフォームクチャクチャと《北海道イクラ》と表示された三角おにぎりも頬張りをはじめ。牛乳と米粒とイクラの粒が口のなかで混ざり合っている間に、ten長は弁当にも手を伸ばす。ただちに包装を剥きはじめると思いきや、椅子から立ち上がり、その弁当を小脇に抱えて店内へと戻っていく。

慣れた手つきで、包装に添えられていたソースの小袋を取り外すと《三陸海鮮フライ弁当》を電子レンジで温める。40秒からはじまり1秒ずつカウントダウンしていく。39、38、37、36、35、34……こんなことまでいちいち見守る必要はない。

待っている間、t e n 長は腰に両手をあてて、舌で口の中のお掃除をしながら外を眺めた。

自動ドア越しに見える駐車場のアスファルトの表面が斑模様になっていた。店を囲むウィンドウガラスを注視すると、わずかな水滴も見られる。

t e n 長はカウンターを出て、駐車場へ向かう。自動ドアが左右にわかれた瞬間、パラサラパラサラという雨粒の音が聞こえた。小さな雨粒に混じって、ときおりボトツという大きな雨粒がウィンドウガラスを叩く。そこへ紫色の乗用車が1台やってきて、フロントバンパーを車止めにあわせて停まった。運転席には、なんと歯抜けの青年が乗っているではないか。

電子レンジがチンツという音をたてて、青年は車から降りた。

ヒズミラクル その4

「おzarrれす」

降りかかる雨粒を気にしながら、青年が店内に足を踏み入れる。

「忘れものschat」

これは一大事かもしれないと私は息を呑んだ。そら見たことか、青年は幼い弟妹たちの朝食もしくは大勢の可哀相な野良猫たちのエサを取りに来たのだ。やはりあのカゴ2杯分の食糧は青年のものなのか。しかし、すでにten長は、惣菜パンとイクラおにぎりと牛乳を貪り食ってしまっている・・・人の物・・・窃盗・・・刑務所・・・拷問・・・絞首台・・・私は思わず最悪の事態を連想してしまう。

食いしん坊さぞや気まずいだろうかと思いきや、臆する様子もなく堂々と電子レンジから弁当を取り出していた。こもっていた調理油の臭いが辺りに放たれる。

一方の休憩室では、ロッカーを開けて、青年が中から黒っぽい何かを取り出していた。次に、それを素早くジーンズのポケットにしまった。それが一体何であるかは想像がつくが、はつきりと見たわけではないので言わずにおく。たぶんアレだろう。

「it'sも忘れrootsよ」

そう言つて含羞みながら、青年はすぐごとレジカウンターを抜けて店の外へ向かう。

「soldier」

「うん。おつかれー」

この和やかさは何だ。一体どういうことなのか。

休憩室に並べられていた包装紙の残骸や開封済みの牛乳パック、そして今まさにten長が手にしている温められた弁当が視界に入らないはずはないのだが、それらについて齒抜けの青年は何も言わずに店を出て、車に乗り込んだ。ということはつまり、あの買い物

カゴ2杯分という膨大な量の食べ物、どうやらten長の朝ごはんであるということの間違いないのか。1食であれだけの量を消費していれば、なるほど太るはずだ。しかしいくら何でも食べすぎだと思うので、腸内を悪質な寄生虫に冒されている可能性も捨てきれないが、私がten長にそれを告知する術はなかった。

歯抜けの運転する車が、バックし始めていた。私はそのあとを追う。

歯抜けの青年は、ルームミラーとサイドミラーを交互に覗きこみながら方向転換すると、コンビニの駐車場から車道へと発進した。

エンジンが唸りをあげるとともに速度計の針が右方向に傾き続け、時速50キロの辺りで行ったり来たりを繰り返すようになった。個人宅や商店、ビル、アパートなどの風景が青年の進行方向とは逆に流れていく。それは建物や樹木が液状化して流れているのではなく、単にそれぞれの地点を通り過ぎたという意味だ。

車内には座席が3つあった。運転席と助手席、そして車幅いっぱいの後部座席。厳密に言えば、1番後ろに畳1枚にも満たない空間があるが、座席と呼べる代物ではない。

後部座席の足元には、丸めたティシューや空のペットボトル、それに表紙の破れたマンガ雑誌がいくつも転がっている。いくらでも足で踏めるが、こういう状態を足の踏み場がないと言うのだろうか。もう一度言うが、どれだけ散らかっていようと、足で踏もうと思えばどれだけでも踏める。

停車した。

フロントガラス越しに赤信号が見える。ワイパーは忙しく反復運動を繰り返し、アスファルトの表面に無数の波紋が広がっているほどに雨量は増していた。

いま、交差点の南側に青年の車は停まっている。ナンバープレートは黄色く、マフラーからは白い煙があがっていた。防寒衣類のマ

フラーが燃えているのではない、ガスを排出しているのだ。

交差点の北西にあたる場所にはファミリーストランが店を構えていた。ピンク地に黒文字が際立つ品のない看板に書いてある文字列が店名なのだろう。24時間営業で年中無休とも示しており、看板に偽りなく窓際の席で若者数名が大口を開けて笑っていた。いまの時刻は 運転席にいる青年は腕時計をしていないのでわからない。携帯電話も見当たらず、シフトレバーのそばにある小さな液晶ディスプレイは、読み取りにくいアルファベットを表示しているだけだった。いまは、何時何分なのか。

5時17分。

私は、テーブルの上に置かれた携帯電話の画面によって現在時刻を知ることができた。

木目調のテーブルの上には大小様々な食器が並んでいて、肉や野菜、米飯などが盛り付けてあった。それらを男と女と男と女と女が囲んでいる。

窓の外を見やれば、くすんだ紫色の塗装を施された軽四自動車が、いままさに交差点を通過しようとしていた。

「でもやつぱりあれしかないと思」まあそうかも知れないけど、あれじゃちよつと「そういえば落研は串揚げやるって聞いたけど」なんで落語をやらないんだよ「知らん」なんか関西に行くとソースの2度漬け禁止とかって言うよね「なにそれ」「え、と、だからあつちの方じゃあ、串揚げにソースをかけるんじゃない、カウターにあるソース壺に直接串揚げを浸して食べるらしくて「ソース壺、なんじゃそら」そのままだろ「生まれてこのかたそんなもん見たことない」生まれてこのかたつて、おまえはいつの「あー、なんか串揚げ食いたくなってきた」注文すれば？「自分らでやれば串揚げ食い放題だな」ソースの2度漬けは禁止「いや、俺らがやる時は、あえて禁止しない」なんでだよ「知らん」ばかな「そういえばソース

壺って1人につき1個なのか？ いちいち捨てて入れ替えるのが面倒く「いや、みんなで1つの壺を使い回すらしい」「なんか汚いな」「だから汚くならないための2度漬け禁止ルールなわけだ」「いや、あえて禁止しない」「だからなんでだよ」「知らん」「またそれか」「さすが関西人はエコロジスト揃いだなあ」「ケチなだけだろ」「関西」「ケチ」という図式は前世紀の遺物だよ明智くん」「誰だよ明智くんって」「知らん」「何の話してんだよ、俺らは」

5人とも若い。それだけなら見ればわかる。しかし彼らの名前まではわからない。職業も年齢も住所もそれぞれの関係も、何もかも私は知らない。知っているはずがない、私はエスパーではない。だが目の前にいる以上、私は彼らについて何かを語らなければならなかった。

ひと抱えほどあるテーブルの両側にはナイロン張りのソファがあり、彼ら男と女と男と男と女が座っていた。ウィンドウガラスに向かつて左側に男3人、右側に女が2人。律儀に席を分けているからといって、この若者たちが淫らな関係でないと誰が言い切れるだろうか、誰も言い切れない。性行為というものは10歳の男児と女児の間でさえも成立し得るのだから まあそんなことはどうでもよい。

2人いるうち髪の長い女が、アイスクリームの入ったグラスにスプーンを抜き差ししている。その隣りにも全く同じアイスクリームのメニューを食べている髪の長い女がいて、ややこしいことに、この2人の髪の長さは同じくらいだった。髪の色も同じく黒い。では容姿ならどうかと思いきや、残念ながらどちらも醜い。美しければ「まるで　のように美しい」というふうに2人のことを区別できるのだが、醜いのだからどうしようもない。反吐と糞はどちらに勝るとも劣らず汚いというように、汚いもの醜いものの差異は表現しづらい。

というわけで長髪と容姿以外の部分で特徴づけなければならぬのだが、私にとって女性の服装など、どれも同じものにしか見えな

かった。そもそもこの醜い長髪の女たちが身に着けている服装の正しい名称がわからない。とりあえず、2人とも長袖の上着と、短いスカートを穿いていた。長袖の方はこれまた似通った色とデザインのものだが、幸いなことにスカートの色が違う。窓際に座っている女は黒1色。もう1人は、黒と白と淡いピンク色のチェック柄を穿いていた。

次に男3人だが、相変わらず益体もないことを喋り続けている。いま現在も男3人女2人のあいだで会話がなされているわけだが、いちいちその内容にまでは言及せずにおく。私にとって、この3人の男たちの特徴を語るほうが優先事項なのだ。

窓際に座っている若者が身に着けている服装の名称もよくわからない。原材料は何らかの繊維なのだろうが、とりあえず『YOROMEKI』という白地にオレンジ色のプリントがしてあるトレーナーの一種と見られるものを着ていた。

次に男性陣の中央に座っている若い男の特徴だが、面倒くさいので、窓際から順に「A助」「B助」「C助」と呼ぶことにしよう。もちろんこの若者たち1人1人には歴とした姓名があるに違いないのだが、どうせ名も無き平民にすぎないのだから、没個性的な記号として扱っても構わないに違いないと決めつけることとする。

ところでB助は、A助とC助の間に座っていて、さきほどから机の下に隠れた左手で、自らの股間を揉みしだいていた。このB助という若者は、色褪せした藍色のソフトジーンズを穿いているのだが、指先の位置を鑑みるに、どうやら鞆丸の裏側あたりを懸命に揉みしだいているらしい。正面に若い女が2人いる現在の状況下において、ともすれば重大なる誤解を生みかねない行為であることをB助自身が自覚しているかどうかは私の知るところではないが、ともかくB助はひたすら自らの鞆丸をジーンズ越しに揉みしだいていた。

残りのC助は、通路沿いの席に座っているわけだが、ずばり言ってこの男は歯槽膿漏だと思う。その吐息が度を越えて臭いからだ。己れの口腔内疾患を知ってか知らずか、C助の目の前にはキムチや

餃子、ホットコーヒーというような香りの強いメニューばかりが並んでいる。

私は、他の4人の若者たちが、C助の香ばしい口臭について内心どう思っているのだろうかと気になった。私は神でもエスパーでもないのに、彼らの心を読み取することは出来ない。しかし、会話中の彼らの表情や視線をずっと観察することで、少しくらいなら読み取れるかもしれないと思った。

注目すべきは、C助の隣りに座るB助と、正面に座るチェック柄スカートの女だろう。この2人は、C助の口臭半径内にすっぽりと収まっている。いわば齒槽膿漏の被曝者だ。

以降しばらく、B助およびC助とチェック柄の女 便宜上、子とする これら3名の発言や表情に、特に注意を払ってみる。

ヒズミラクル5

「我々えー、トイレット研究会としてわぁ」

「ふは、ふひゃぶ」

B助が吹き出し笑いをした。A助がおどけて見せたせいだろう。

今のところ、右隣に座るC助の口臭に対する不快感など微塵も見られない。

「去年と同じでいいんじゃない？ えっと、ほら《我が街のトイレ100選》だっけ？」

C助の正面に座る 子が言った。溶けたバニラアイスが、パフェグラスの底に1センチほど溜まっている。スプーンの柄はグラスの高さ以上に長く、それを掬い取ろうと思えば出来るようだ。しかし子は白く濁った液体を徒らにかき回すだけで、決して掬って口に入れようとはしないでいた。単なる見栄か、はたまた最後に一気呑みするための伏線か。いずれにせよ、正面に座るC助の口臭に対するリアクションは見られなかった。

「だけど《トイレ100選》なんて、俺たちトイレフリークスのユーエイジからしたら、何の意味もないと思うぜ。あんなもん、飲食店とか小売店のトイレ写真を撮って、古い汚い臭いとかのキャプションをつけるだけだろ？ あんなのより、思い切って俺たちが今やってることを発表すりゃあいいだろ」

ようやく口臭魔人ことC助が発言した。キムチを咀嚼しながらだったので、半径1メートルの範囲に、ニンニクやニラ、そのほか香辛料の強烈な臭いが広がった。歯槽膿漏による酸っぱい腐ったような臭いは、キムチのおかげで気にならない。

そしてどうやらC助の発言は過激な内容を含んでいたらしく、他の4人が一斉に顔を向けた。ここで私は見逃さない。早くも隣りに座っているB助の様子が不自然だった。わずかながら眉間に皺が寄り、唇をややきつく閉じていた。その様子は、呼吸するのを躊躇

っているかのように見えた。はたしてB助は、キムチ臭に辟易としているのか、はたまた口臭のほうなのか。

「わたしたちのやつてることを発表するのはヤバイと思う……」

「」

喉を押し殺したような声で、窓際に座る黒ミニスカの女、すなわ

ち 子が言った。

「なんで？」

即座にC助が言い返す。テーブルを見れば、キムチの小皿は空っぽで、目に沁みるような朱色の液体と白菜屑が残っている。実際、キムチの汁を眼に注ぎ込めば、やはり沁みて痛いだろう。

そばには餃子を盛り付けた楕円形の平皿があったが、それにもわずか2切れしか残っていない。C助は箸で餃子をつまみあげると、キムチの残滓に浸して、それを、ひと口で頬張ってみせた。一見、行儀悪く見えるが、C助にとってこれは必然的な行為だった。もうそろそろ、C助の尊厳のために詳しく説明するのはよそう。

「みいじゃん。ねんぶ発泡しちまおうで。まぶん、この先、10年は語り継ガレネフことになると思うよ、俺の予想では」

餃子を頬張っているのでCの発音は聞き取りにくい。A助やB助や 子や 子は、突発性の発語障害にかかったかのように二の句をつげないでいた。あきらかに、C以外の全員が戸惑っている。これは果たして、C助の発言内容に対してなのか、それともC助のおぞましい口臭に対してなのか、もう少し見守らなければ判別できない。「俺らがあんなことやってるってバレたらヤバイに決まってるだろ。退学……下手したら、高いコンクリート塀プラス有刺鉄線の向こう側へと引越すことに」

C助のいる方へと身を乗り出して、窓際のA助が小声で囁いてみせる。なんとも意味深な発言だ。あいだに挟まれたB助は苦々しい笑みを浮かべながら、同意するように頷いている。この様子から見て、男性陣の順列は《C助〃A助 B助》なのではないかと私は思った。C助とA助は親しく、B助はその関係から少し距離があると

いう感じだろう。

『退学』『高いコンクリート塀の向こう側へ引越しのサカイ』この2つのキーワードがほのめかすものは『不祥事』や『犯罪行為』にほぼ間違いないと思う。『退学』という言葉からは、彼・彼女らが学生 外見から察するに18歳以上だと思うが、必ずしも大学生だとは限らない。高校3年生かもしれないし、短大生かもしれないし、専門学校生かもしれないし、はたまたフリーター、でんぐり返って無職なのかもしれない。なにせ私は彼らの詳しい来歴を知らない。たとえ『退学』というキーワードが『大学籍からの追放』を指し示していたとしても、ここにいる5人全員が大学生であるとは限らない。なぜなら、私が耳にした限り、これまでに自らが大学生であることを証明するような言葉を発したのはA助、C助、そして子だけだからだ。子もトイレ研究とやりに携わっているかのような発言をしたものの、それはトイレ研究会の一員であることを辛うじて示すものであって、大学生としての身分を断定できるものではなかった。モグリということも考えられる。B助においては、笑い声しか発していないので、その身分はもとより、トイレ研究会の一員であるかどうかすら不明だった。ところで、そもそも私は一体何について考察していたのだったか。あまりにも話が横道に逸れてしまったので、すっかり忘れてしまったではないか。いったい何の話を。

「れにしても、来週中には決めないと」

「だね。ガクサイって来月の……」

「5日」

「うわっ、もう時間がねえ」

声だけが私の耳に入り、それぞれ誰の発した言葉なのか、確認し損ねた。またしても内省的になるあまり、彼らの会話の重要な部分を聞き逃してしまったのだ。いったい私は、どれだけ失敗すれば気が済むのだろうか と、ますます内省的になってしまふようなことは考えずにおく。済んだことは仕方がない。オッペケペー。

「あ、そういえば昨日の《カンジョレ》観た？」

唐突に、子が話題を変えた。チェック柄のスカートを穿いている女だ。

「何それ。テレビ？」

C助が、残り少ないホットコーヒーを嚙ってみせる。その手元を見れば、キムチ無し、餃子ゼロ。頼りのコーヒーも、カップの底が見えはじめていた。これからどうやって己れの凄まじい口臭をごまかすつもりだろうか。

「……が出てる奴だろ。アイツ、モテモテだな憎たらしい」
窓際に座っているA助が会話に加わる。そばには食べ散らかした鉄板皿と、飯粒がこびりついた白い皿があつた。平たい鉄板皿には、どろりとしたソースと脂が浮いているので、おそらく、ステーキかハンバーグの類を食べたのだろうか、それらの材料が、必ずしも豚や牛や鶏などの一般的な家畜の肉であるとは限らない。なぜなら、ここはファミレスだからだ。

A助や 子たちが、最近どうやら注目を浴びているらしい俳優について擁護論や批判的意見を戦わせている一方で、今まで沈黙を守っていたB助が、わずかな動きを見せた。

私が見ていた限りでは、B助という青年は、他の4名の若者たちの会話にちつと耳を傾けているだけで、発言らしい発言をした様子はない。この青年に対する印象といえば、つい先程まで、ひたすら自分の股間を揉みしだいていたことが私の記憶に新しい。

そんな私の真新しい記憶に残っているB助の左手が、テーブルの端に置いてあつた会計レシートを掴んだ。そして自分の手元に引き寄せて、しばらく眺めたあと、股間を揉みしだいていない方の手つまり右手を、穿いているソフトジーンズの右ポケットに突っ込んだ。

他の4人の者たちは、チンチンカイカイB助の動きには目もくれず、人気俳優に関する議論を続けている。

会計レシートは、白い陶器製のグラタン皿とケチャップの跡が生

々しい平皿の間に挟まれて、B助の目の前に置いてある。グラタン皿の中には、小指の先くらいのエビが6つほど隅に寄せて残っていた。ただ嫌いだから残してあるのか、それともお楽しみを最後に取り置いてあるのか、私にはわからない。

ヒズミラクル その6

トウフトチーズノオチャメサラ

イカゲソカラアゲ

キノコゾエパエリアフウ

スペシャルハンバーグゼン

スーパセット

ニャンニャンギョウザ

サンジユウハチドセンキムチ

ドリンクバー×5

イチゴトマンゴーノパフェ×2

イカホオンセンタマゴ

ヤマノテハンバーグセット

イカメンタイ

ボーイミートガールスパゲッテ

カリファルニアポテトスティック

エイコクフウタマゴサンド×2

会計レシートは、全部で3枚あった。そして、B助の手元には、いつのまにか封筒が握られていた。それは股間を揉みしだいていない方の手。つまり右手にあるので、さきほどポケットから出したのは、この封筒だと思う。

それは白地にわずかな赤い二重線が施されているシンプルなもの、端には《×銀行》というロゴが印刷されていた。ここでいちおう言うっておかなければならないが、この《×銀行》というのは私の目に映ったそのままの表記であり、この《×》とは匿名性を表わす記号ではないということだ。B助が手にしている封筒には、確かに《×銀行》と印刷されているのだ。あいにく、フリガナが打たれていないので、読み方まではわからない。常識的に考えるな

らは「マル・バツ」と読むのかもしれないが、そういう読み方は、むしろ匿名であることを強調する場合の読み方であり、もしかして「ヒヨンロロロ・ピー」銀行などと読むのかもしれない。さらに穿って考えるならば《x》の部分だけではなく《銀行》という部分の読み方も、社会通念としての「ぎんこう」ではなく「トレロレンルヌ・パツツン」なのかもしれない。仮にそうであるならば《x銀行》の読み方は「ヒヨンロロロ・ピー・トレロレンルヌ・パツツン」なわけだが、おそらく「マル・バツ・ギン・コウ」が正しい読み方なのだと思う。

「足りるか？」

窓際のA助が、会計レシートを手にとって言った。

「うん。昨日ちょうど売上口座から下ろしてきたから」

そう言って、B助は封筒の中から紙幣を1枚取り出してみせた。どうやら、ここにいる5名の食事代を、彼ひとりが一括して支払うような雰囲気だ。ところで「売上口座」とは何のことだろうか。

「あつ、おい、1万ッケテケー越えてるぞ。ちよつと食いすぎだろ」

A助が呆れたような笑い声をあげて、C助の方に視線を向けた。それは非難するような口ぶりではなかったが、その言葉のとおり、C助の前には、キムチを筆頭とした口臭緩和メニューのほかに、食べカスの付着した皿が3枚もあった。

「ごちそうさまー」

嬉しそうな表情で開き直ってみせるC助の傍らで、B助は封筒を再びジーンズのポケットにしまっていた。手には1万ッケテケー紙幣が2枚、つまり2万ッケテケーが握られていた。いちおう言うておくが「ッケテケー」とは通貨単位のことだ。B助が持っている紙幣の表面に《10000ッケテケー》と印刷されているから間違いないと思う。

「それにしても、先月の売上、すごかったよなあ……80ウン万だろ、確か」

「87万2700テツテケテー」

まるでC助の曖昧さを叱りつけるように、隣りのB助が早口で言った。さきほどの封筒の金といい、どうやらチンチンカイカイB助は、このいかがわしいグループ内における金庫番の役割を担っているようだ。

ところで、先月の売上が「87万2700テツテケテー」あったというが、これは一体どういう意味だろうか。「売上」と言うからには、アルバイトなどによって得た賃金ではないだろう。

いったい、どのようにして稼いだ金なのか。

実をいうと、ここだけの話だが、他の者に知られると非常にマズイ話なのだが、私にはおおよその見当がついていた。先程からこの5人の若者たちの会話を聞いているうちに、ピンとひらめくものがあった。

ズバリ言ってしまうおう。

彼らは《トイレ盗撮》を行っているに違いないのだ。

80万テツケテケー余りもの売上は、トイレ盗撮映像を販売することによって得たに違いないのだ。彼らは「トイレット研究会」という、何の有用性もないかに見えるサークル活動を隠れ蓑にして、トイレ盗撮ビデオの地下販売を行っているに違いないのだ。そしてトイレ盗撮というからには女子便所、女子便所といえば通常は女性しか足を踏み入れることができないわけで、すなわち 子か 子が盗撮カメラ設置の尖兵となっているに違いなく、この2人の醜女は憎むべき犯罪者であるに違いないのだ。醜いのは顔だけかと思っていたが、どうやら性根すらも醜いに違いないのだ。

そしてそして、さらに憎むべきは、その心身ともに醜い2人の女たちを背後より操っている男性3名の存在だ。その面々が「A助」「B助」「C助」であるのは、もはや疑いようのない事実であり、私は確信している。そして、彼らは盗撮ビデオを販売しまくってい

る。そうでなければ、1ヶ月のあいだに80万テツテケター近くの売上を得ることなど不可能なはずだ。まあ、もしかすると「トイレット研究会」だけに、何か特別な《トイレットペーパー》を製造・販売している可能性も考えられるが、彼らが発した数々の言動からすれば、ちよつと有りえない。つい数分前　口臭魔人ことC助が、自分たちの活動を大々的に発表すればいいと言い放った時に見せた他の4人の凍りついた表情を、私は決して見逃さなかった。そして「わたしたちのやつてることを発表するのはヤバイと思う……・・・」。「俺らがあんなことやつてるつてバレたらヤバイに決まってるだろ。退学……・・・下手したら、高いコンクリート塀プラス有刺鉄線の向こう側へと引越しするならダック」などという若者たちのひどく怯えたような発言を思いおこせば、この5人の男と女と女と男と男たちが、憎むべき犯罪者集団であることは明白であり、可及的速やかに最寄の警察署に通報するべきなのだが　それは私の役割ではない。

勘違いしないでいただきたいのは、この「私の役割ではない」という私の述懐は「私は遵法精神あふれる立派な市民ではないし、そもそも犯罪の告発というものは、国民の税金により運営されている警察もしくは検察の役割であり、そんな面倒なことができるほど私はヒマ人ではないのだ。ああ忙しい、忙しい」などというような《自らのことを善良な市民だと思い込んでいくせに、いざとなると何もできない小心者》が時折見せる典型的態度などでは決してなく、ただ単に、私の役割でないだけなのだ。だって、だって考えてもみていただきたい　電灯のスイッチを「OFF」から「ON」にもできないほど強い制約を受けている私が、どうして受話器を手に取り緊急回線のダイヤルを回して通報するなんてことができるだろうか。できないでしょう。できないのだ。できないもん。

さておき。

私が我に返ると、あの5人の男女たちの姿が無かった。有るのは散らかったテーブルと、布地に非芸術的なシワを寄せている空虚なソファーだけだった。

私はこれを、どう見たら良いのだろうか。

世にも不思議な人間消失現象か？ それとも壮大な連れションすなわち、大小それぞれの用便を足すために集団でトイレへと向かったのか？ はたまた……もう、よそう。

私は、またしても内省的になりすぎるあまり、彼らのことを見失ってしまったのだ。

あたりを見渡すと、空いた席が目立っていた。それでも、わずかに数組の客が、このファミレス内で食事をしていた。

残念なことに、私の視界内には、若き犯罪者たちの姿は無かった。さきほど、B助が封筒から金を出していたことを考えると、もしかや食事の清算に向かったのかもしれない。

しかし、レジカウンターらしき場所には誰もおらず、今なら難無くレジスターに納められた現金を強奪できるだろうが、そのとき、突然、驚くべきものが私の目に飛びこんで来た。飛び込んで来たと言っても、私の眼球に向かって蠅や蜂などが飛来して来たという意味ではなく、ある生物の姿が私の目に映ったのだ。

ヒズミラクル その7

その生物は、衣服を何も身に着けておらず、全身の素肌を露わにして、このファミレスの店内に入ってきて来た。

その肌は白く、とても白く、まるで白玉団子の　そう、まさしく白玉団子が歩いているのだ。言っておくが、白玉団子のような白い肌を持つ人間ではなく、「人間の形をした身長160センチほどの白玉団子そのもの」が、私の目の前に現れたのだ。

白玉団子は、3人連れだった。白玉×3という意味ではなく、若い男女の後ろに連れ添うようにして素っ裸の白玉団子が立っていた。若い男女の方は、きちんと衣服を身につけている。

すこし遅れて、お客の到来を嗅ぎつけたウェイトレスが姿を表わす。

「いらつしやいませー。2名様でしょうか？」

その言葉に、私は自分の耳を疑った。だが、疑ってもしょうがないので聞こえたまま受け取ることにすると、ウェイトレスは白玉団子を頭数に入れなかったのだ。なぜなら、若い男女のほうは仲睦まじく腕を絡めていたからで、ウェイトレスが言うところの「2名様」とは、この男女のことに間違いないだろう。

すぐに訂正するかと思いきや、若い男の方が無言でうなずき、ウェイトレスの「2名様発言」を了承してしまった。白玉団子の方をうかがえば、異議を唱えるような様子はなく、ちっと黙っていた。

「では、おたばこおすいになりますでし　あはいそれではあちらのきんえんせきになりますすこちらですどうぞ」

何かを早口でまくしたてながら、ウェイトレスが店の奥に向かって若い男女を導く。その後ろを、白玉団子がついて行く。膝を曲げずに歩いている。外見は人間の形をしているものの、白玉団子はお尻を備えておらず、背中から踵まで、ほとんど膨らみが無かった。

ウェイトレスは、はじめ窓際の席を勧めたが、若い2人はそれを断り、通路を挟んだ向かいの席を希望した。ウェイトレスは無表情でそれを承諾して、再び店の奥へと戻って行った。

ソファアーに腰を下ろす際、男の方がサングラスを通して、控えめに辺りを見回した。窓際には5席あったが、そのうち2席が埋まっ
ていて利用者がいる。

若い2人は、巷の恋人たちの例に漏れず、テーブルの片側に肩を寄せ合って腰を下ろした。白玉団子は、その向かい側に座って、ソファアーを独り占めした。

「あ………て………そ………」

女が、男の耳元になにかを囁きはじめた。この女もサングラスをかけている。おそらくオシャレなのであろう帽子も脱ごうとはしない様子だった。すぐに男が女の耳に囁き返すと、口元を緩めてクスクスと笑い声を漏らしていた。私は、ほんの少し気分を害してしまい、白玉団子の方に目を向けることにした。

白玉団子は、テーブルの上で頬杖をついている。あらためてその表情を眺めると、やはり白玉団子そのもので、目もなければ鼻もなければ口もなければ眉もなければニキビも無い、いわゆる「のっぺらぼう」だった。それから、両手で頬杖をついたまま、わずかに顔を左右に揺らしていた。

「失礼いたしまーす」

早速、ウェイトレスがお冷を携えてやってきた。丸いトレイから下ろされたのは、背の低い2杯のグラスと、フォークやスプーンが収められている小さな籠で、ウェイトレスは当然のようにグラスを2人のそばに置いた。2人とは、つまり若い男女ふたりのことであり、あるうことか白玉団子の分が無かった。

この瞬間、私は、ウェイトレスの白玉団子に対する差別的待遇に接して頭に血がのぼりかけたが　すぐに興奮は収まった。

ウェイトレスには、白玉団子の姿が見えていないらしい。

この事実が気がついた私は、さっそく白玉団子を注意深く観察することにした。

白玉団子は、相変わらず頬杖をついて、顔らしき白玉団子を左右に揺らしていた。よくよく見れば、この白玉団子は「化け物」と言っても差し支えなく、両手で頬杖をついている姿は不気味だった。

一方の若い男女は、メニユー表を眺めながら、何やらヒソヒソと囁きあっている。おそらく、彼らも白玉団子の存在に気が付いていないに違いなかった。なぜなら、いくら恋は盲目と言っても、こんな白玉団子の化け物が目の前にいれば、どんなデレ助デレ子でも悲鳴の1つぐらいはあげるだろう。全く見えていないからこそ、平気でイチヤイチャしてられるのだ。不愉快な。

例によって、私は、この若い2人が何者であるかを知らない。しつこいようだが、私は超能力者でもなければ、全知全能の神でもない。だから、見た目で判断するしかない。

デレ助とデレ子は、2人とも顔立ちが整っていた。瞳は大きく、鼻筋が通っていて、唇も薄い。それこそ、さきほどのトイレット研究会の者どもとは比べ物にならない。

と、まあそのような他人の容貌にまつわる中傷はこれくらいにしておくとして、次に、デレ助デレ子の身なりに目を移せば、安くない格好をしていた。なぜそう思ったかと言えば、特に根拠はない。ただ、カーディガンとか、ジーンズとか、セーターとか、ましてやトレーナーとか、そういう単純な種類の服装ではないらしいということが、2人の服装からは見てとれた。

苦手な服装の話題はこれくらいにして、現在の時刻は、午前5時49分だった。デレ助が身に着けている腕時計の表示を見たわけなのだが、服装と同じく、これもまた安くない代物なのだろう。

ウィンドウガラスの外が少し明るくなっていたものの、まだ雨が降り続けていて空は薄暗い。などと私が思っていると、窓際の席に座っていた女の3人連れと目が合った。

しかし、彼女たちと私が目を合わせられるはずがないので、正確に言えば、窓際の連中がデレ助デレ子の席の方向に視線を向けていたのだ。

窓際の女3人連れは、テーブルを軸にして手前に1人、奥に2人が座っていた。驚くべきことに 先程から驚くべきことばかり続いているが、とにかく驚くべきことに3人が3人とも同じ顔をしていた。髪型もほとんど同じ茶髪のロングヘアであり、服装は全く同じではないものの、同系色のスウェットを着ていた。

戸籍を閲覧してみなければ断言できないものの、おそらく彼女たちは3つ子ではないだろうか。小鼻の脇にあるホクロの位置まで同じなのだから、ほぼ間違いないと思う。

そんな一卵性多胎児たちが、揃いもそろってデレ助デレ子の方に視線を向けているので、すこし気味が悪かった。私の目の前では、依然として白玉団子の化け物がカワイイ感じで頬杖をついているのだが、3つ子の実在は、それにも増して異様な光景だった。

「何か、食べようかな」

「慎也はメニュー表をめぐりながら、胃にもたれすぎないような軽食を探していた。ハンバーグやその他の肉類などは受けつけそうもなかったし、パスタメニューでさえも、今の慎也の胃にはすこし重く感じた。それから、ひと通りメニュー表すべてに目を通したものの、なぜかサンドイッチなどの軽食メニューは見当たらなかった。見逃したのかと思い、慎也はもう1度はじめからメニュー表を手繰りはじめる。その横でパピ子は、口をはさむわけでもなく、慎也の様子を見守っていた。パピ子は、こういう何気ない時間を幸せに感じる女なのである。」

と、白玉団子が言った。

確かに言った。とてもその声は小さかったが、間違はなく、私は白玉団子が喋るのをこの目で見て、耳で聞き、肌で感じた。

私は、その声と内容の聞き取りを確実なものにするため、思い切
って、白玉団子の唇があると推測される白玉団子の一部分に近づい
てみた。

「あ。あつたあつた」

「3つ、あるね」

「2人は、メニュー表のなかの同じ写真を指差してみせた。パピ子
の言うとおり、サンドイッチのメニューは3種類あつた。価格はそ
れぞれ似たようなものであり、ハムや卵やフルーツの具材、という
ような種類があつた。」

白玉団子は、息継ぎをする気配も見せずに、ただひたすら朗々と
喋り続けていた。テーブルに頬杖をついて、2人の男女を代わるが
わる眺めながら、たとえば慎也ことテレ助が声を発すれば、白玉団
子は慎也の方に白玉団子の顔を向け、パピ子ことテレ子が声を発す
れば、そちらに白玉団子を向けた。

つまり、白玉団子には、声を発した人間を必ず一瞥するという習
性があるようだ。なにも、カワイ子ブリっ子のつもりでルンルンラ
ンランと首を振り続けていたわけではなかったのだ。私は、勘違い
をしていたらしい。

ヒズミラクル その8

「これも胃にもたれそうだなあ」

「あまり気が進まない様子で、慎也はメニュー表を閉じようとする。

と、男の方に顔を向けながら、白玉団子が呟く。

「え、なんで？ サンドウィッチくらいなら大丈夫じゃない？」

「そう言いながら、パピ子はメニュー表を受け取ると、サンドイッチメニューの写真をちつと眺めた。」

女の方を見てそう言ったのは、やはり白玉団子だった。

「フルーツサンドウィッチが一番胃にもたれないっぽいけど、これって生クリームが挟んであるから、実際はもたれるかもね。タマゴサンドはマヨネーズが混ざってあるだろうし……じゃあ、ハムサンドウィッチしかないね。これにしたら？」

「楽しそうに、パピ子が3種類のサンドイッチの解説をしてみせる。

それはまさに、成熟した俳優の朗読劇だった。白玉団子の声は、聴く者の耳に心地良いのだ。

「いや、俺が問題にしているのは中身じゃないんだよね、パピ子ちゃん」

「得意気な顔で、慎也がふたたび口を開いた。」

と、白玉団子。

「えー？ シンくんの問題って、なーに？」

すこしばかり胸焼けがしてきた。

しかし、それは気のせいであり、私は、テーブル上の「お冷」に手を伸ばしたい衝動に駆られたような気もしたが、それはやはり気のせいに過ぎなかった。つまり、目の前にいる2人のやり取りに對して感じた胸焼けは、私の気のせいだった。

「だって……この店のサンドイッチには、どれにも耳が付

いているだろ？ 俺、嫌いなんだよねパンの耳が」

「慎也は、メニュー表に印刷してあるサンドイッチの写真を指でなぞってみせた。たしかに、フルーツ、タマゴ、ハムいずれのサンドイッチの写真にも、耳つきのパンが使用されていた。どれにも英国風と銘打たれていて、さらに本格派などという売り文句も添えられていた。」

と、このように白玉団子が如才なく働いてくれるので、私はしばらくの間、黙っていることにする。休息の意味も兼ねて、熱いコーヒーの1杯でも飲みたいものだが、私には望むべくも無い。

「へー……じゃあ、お店の人に言つて、サンドウィッチの耳だけ削いでもらえば？」

「至極真つ当な意見だった。」

「あは。おい、なんだよ『削いで』つて。パピ子は難しい言葉知ってるんだなあ」

「えー？ だつて、ふつう『耳を削ぐ』つて言うでしょ？ 変？ 豊民秀太郎が朝鮮出兵したとき、敵兵の耳を削いで塩漬けにしたものをお土産にさせたつて話あるし」

「パピ子は、こう見えても読書家なのである。撮影の待ち時間などを利用して、特に歴史小説の文庫本などを読むのが習慣になっていた。それは、パピ子の出演作に参加したことがあるスタッフなら、誰もが目にしている光景だった。」

と、淀みのない口調で、白玉団子が言った。

驚くべきことに、この白玉団子の化け物は、デレ助デレ子の名前が「慎也」「パピ子」であることを知っているし、そのほかにも彼らの詳しいプロフィールや来歴なども把握しているようだった。

私が察するに、白玉団子によるパピ子に関する説明のくだりで「撮影」「出演作」などという単語が飛び出したことから、この読書が趣味の女は、女優かテレビタレントを生業としているのだろう。どつりで目鼻立ちが整っているはずで、おそらく慎也も同じ業界の人間にちがいない。

「……なあ、パピ子」

「慎也が、わずかに眉根を寄せて、隣にいる恋人の顔を覗きこむ。」
「なあに、シンくん？」

「そう言つて、パピ子はサングラスをはずしてから恋人に視線を送り返してみせる。」

「俺、ちよつと気になつてただけどさ……この食べ物の名前は？」

「そういつて、デレ助は、メニュー表に印刷されているサンドイッチの写真を指差した。」

「え、これは、ハムサンドウィッチでしょ。 やつぱりこれにするの？」

「いま、何て言つた？」

「フフ、もー、なーに？ ハムサンドウィッチでしょー」

「おかしそくに口元を緩めながら、パピ子は、慎也が差しているそのひとさし指を、やわらかい掌でそつと握りしめる」

「パピ子ちゃん、違うよ。これはサンドイッチっていうんだよ」

「そうだよ、サンドウィッチだよ。もー、シンくん、なーに？」

「サ・ン・ド・イ・ツチ」

「サ・ン・ド・ウィ・ツチ」

「慎也の言葉のあとに続いたパピ子は、ようやく、自分の恋人がなにを言いたいのかを悟つた。」

と、白玉団子が言つたのと同時に、私も悟つた。

つまり「肉や野菜をパンにはさんだ軽食」の呼称における、ささいな発音の違いについてだった。実に、ばかばかしい。くだらない。そもそも、こういう細かいことにこだわる男というのは、将来かなりの高い確率で、恋人や妻に対して暴力をふるうようになる。いわゆるドメスティックバイオレンスのことなのだが、まあそんなことはどうでもよい。2人のやりとりを見ているうちに、思わず反吐が出そうになったが、もちろん実際には出なかった。

私は口直しに、思い切つて、一卵性多胎児たちがいる窓際の席に

移ることにした。と言っても、似た顔が3つも揃っている光景は、うす気味悪いと言っても差し支えないほどで、口直しになるかどうかはわからない。

「　　ったい、ヤツてると思う。もう3日3晩やりまくり」

デレ助たちから見て、テーブルの手前に座っている3つ子Aが、声をひそめて言った。

「ちよつと！　聞こえたらどうすんのよ」

慌てたように、3つ子が「シー」と立てた人差し指を、唇にそえてみせる。その隣に座っている3つ子は、必死になって笑いを押し殺していた。

ちなみに、ロシア文字を3つ子のそれぞれに割り振ってみたのだが、特に意味はない。これらは、A^{アイ}（デー）（ゼー）と読み、厳密に考えるならば、3つ子といえども、もしかすると全員が同い年ではないかもしれず、たとえ同じ分娩のときに一気呵成に「ポン・ポーン・ポーン」と産まれたのだとしても、その後、分娩に立ち会った医療関係者ならびに母親のきわめて曖昧な記憶ならびに両親による恣意的な判断によって姉妹の区別がなされているはずであり、ちよつと長くなってしまったが、とにかく「A」「」「」という3つの記号の割り振りが適切かどうかということに関して、私は責任をもてないということが言いたかった。

「写真撮ろ」

さきほど品性の無い発言をした3つ子Aが、自分の携帯電話をそつと手に取る。

「やめなよー。怒られるって」

どうやら3つ子は、3姉妹のなかでは「いさめ役」のようだった。しかし、そう言いつつも、デレ助デレ子の方をチラチラと気にしていた。

「写真週刊誌とかに売ったら、お金もらえらしいよー」

そう言ったのは、さきほどまで愉快そうに傍観していた3つ子だった。つくづく品性が下劣な連中だと思った。

私はどちらの味方というわけでもないが、デレ助デレ子たちの方をうかがえば、素人パパラッチの気配に全く気がついていない様子だった。急遽、私は席を移ることにする。

「だから、サンドウィッチって言うなよう。わかった？」

「まるで、幼い子供がもう1人の幼い子供を諭すような言い方だった。たかがサンドウィッチの呼び方ごときに、憤也がどうしてこれほどまでにこだわるのか、パピ子には理解できなかった。以前から、自分の恋人には少なからず幼児性を感じていたものの、それは憤也の数多い魅力のうちの1つだと信じて疑わなかった。しかし、このサンドウィッチの件に接して、わずかながら、パピ子は2人の前途に不安を感じてしまった。このように、ほとんどの恋愛にもれなく付いてくる「美化フィルタ」という装置は、ほんの些細な出来事ではずれてしまうものらしい。」

白玉団子の分際で、なかなか小難しいことを言う。しかも、パピ子の心理にまで言及するという離れ業をやつてのけている。

さすが白玉団子の化け物だけあって、人の心まで読めるというわけだ。とてもじゃないが、平々凡々たる私などには真似ができない。これからは呼び捨てるのではなく、敬意を表して「白玉団子氏」と呼ぶことにしようと、私は思った。

「ぶにゃん」

とは何事か。

そうつ音が、私の耳に入ってきた。

ヒズミラクル その9

はて「ぶにゃ〜ん」とは何だろうか。「にゃ〜ん」だけならば、これはネコの鳴き声であると確信が持てるのだが、しかし先頭に「ぶ」という濁音がついている。ネコの鳴き声にも「ごろにゃ〜ん」という先頭に濁音をもつて表現されるものがあるので、べつに「ぶにゃ〜ん」がネコの啼き声であっても差し支えがあるわけではない。

「ぶにゃ〜ん」

「ぶにゃ〜ん」

つぎは2連続で聞こえてきたわけだが、これはネコが2匹いるということだろうか。つまりこのファミレスの店内のどこかに、たとえば親子、もしくは兄と妹、もしくは叔父と姪、もしくは茶呑み友達のネコなどが2匹潜んでいるということだろうか。それとも1匹が2連続で啼いたのだろうか。

「ぶにゃ〜ん」

私が「ぶにゃ〜ん」の出所を探るためにファミレスの店内を見回していると、そこへちょうどウェイトレスがやってきた。デレ助とデレ子は、待ち構えていたように、くたびれた女の顔を見上げる。

くたびれた女とはウェイトレスのことで、見た目は30代前半というところだった。いかにもウェイトレス風の格好をしていて、服装の名称にうとい私の手には余るが、それは少なくとも割烹着で無いことは確かだった。

「ご注文をおうかがいします」

「デレ助が呼び出しボタンを押してからまもなくして、ウェイトレスがやってきた。手には、テレビのリモコンをふた回りほど大きく

したような端末を携えている。おそらく深夜パートタイマーなのである。年増のウィトレスは、喜びとも悲しみともつかない表情で、その場に佇んだ。」

「ええと、えつとね『本格ハムサンド』ひとつ、それと、ええと、あとはオレンジジュースも下さい」

「通路側に座っているパピ子が、メニュー表のところどころを指差して注文する。」

「……サンドがおひとつ。オレンジジュースがおひとつ。飲み物はドリンクバーでのセルフサービスとなっておりますが、よろしいでしょうか？」

「うん、いいよ。あ、それと俺もドリンクバーひとつね」

「パピ子に続いて、だいぶこなれた様子で慎也が告げてみせた。」

「え？ シンくん、サンドウィッチ……サンドイッチは？」

「わざわざ言い直すところなど、なんと健気な女だろうか。」

「やめとく。やっぱり耳付きのサンドイッチなんて食べねえよ」

「だから大丈夫だって。私が、ゼーんぶ削いであげるって言ったでしょ？」

「べつに構わないのだが、削ぐという言葉は何か物騒な感じがする。パピ子に促されて、ようやく慎也はサンドイッチを注文することにした。タマゴサンドである。」

「ぶにゃん」

また聴こえた。

私は即座に「ぶにゃん」の方向へと視線を向ける。啼き声の先には、どうやら血統書付きらしい毛並みの良さそうな仔猫　などが居るわけもなく、代わりにいたのは、どこの馬の骨ともつかない、意地汚く、うす気味の悪い3つ子Aと　だった。

「ぶにゃん」

私は、ふたたび3つ子たちの席に移る。

そこには、携帯電話を掲げている3つ子Aの姿があった。その小さな液晶画面には、あるうことかデレ助デレ子の姿が映っているではないか。

これはつまり盗撮。すなわち盗撮。要するに盗撮。ひいては盗撮。限りなく盗撮に近い盗撮。若きウェルテルの盗撮。百年の盗撮。続いている盗撮。盗撮、あおむけにされて。盗撮人たち。盗撮船団。盗撮のガスパール。盗撮好き盗撮好き盗撮大好き超盗撮してる。盗撮ガール。蹴りたい盗撮。いずれにしても、もはやこれは犯罪行為と呼んでも差し支えない所業だった。

さすがはファミレス。現代を代表する「スラム階層の集会所」だけのことはある。

「ぶにゃん」

卑劣な3つ子Aが携帯電話のボタンを押すと、おなじみの声で啼くのが聴こえた。その小さな画面を見れば、ウェイトレスの背中に遮られているものの、通路側に座っているパピ子の表情がはっきりと映し出されていた。

つまり、件の「ぶにゃん」とは、携帯電話に付属しているカメラのシャッター音だったのだったのだったのだった。

「あのウェイトレス、ジャマ。マジいますぐ死んで欲しい」
携帯電話を構えたまま、3つ子Aが悪態をつく。

これは、例えば銀行強盗が、奪うカネを袋に詰めている行員にむかって「紙幣の方向を揃えて入れろ。それから新札と旧札を混ぜないでね。でないと殺す」と言うのに等しいと思うのだが、余計わかりにくいかもしれない。

まあそれはともかくとして、3つ子Aは、テーブルの上に両肘をつき、カメラのブレを最小限に抑えて、ますます盗撮行為に励んで

いた。

もしも私が全知全能の神であったなら、この3つ子Aがシャッターボタンを押す瞬間に、テーブルに向かって全力で蹴りを入れてやりたいところだが、まあ例によってそれは実現不可能な願望にすぎなかった。

「2人が注文を告げ終わると、ウェイトレスは確認もせずに、さつさと席を離れていった。注文メニューの復唱は、ファミレスにおいてもはや常識だと思うのだが、あの年増のウェイトレスはそれを怠った。とはいえ、あの注文品目の復唱というのは、客の立場からすると、やや居心地が悪いというか、気恥ずかしい感じがするのも確かである。」

白玉団子氏が、現代のファミレス文化について考察をしてみせた。「ウェイトレスが立ち去ったあと、パピ子は窓の外を眺めた。この店に入ったときよりも、ずいぶん空は明るくなっていた。しかし、まだ小雨はふり続けている。」

「ぶにゃん」

例のシャッター音が、また聴こえてきた。ウェイトレスの陰に隠れてやっているのかと思っていたが、そんなことはお構い無しのようだ。

「天井のあたりを漂うBGMに混じって、妙な啼き声がパピ子の耳に入ってきた。辺りを見回していると、窓際の席にいた利用客と、うっかり目が合ってしまった。」

「あ」

「それと同時に、自分たちに向けられた浅ましい窃視線にも気づいたが、この突発的な事態にパピ子はどう対処すればよいのかわからず戸惑った。とりあえず反射的に、隣にいた慎也のジャケットを引っ張る。」

「ん？　なに、パピ子ちゃん」

「顔をしかめ不快そうにしている恋人の視線の先には、携帯電話を構えた一般人の姿があった。驚いたことに、その3人ともが同じ顔をしていたので、慎也は自分の目を疑った。コンタクトレンズがずれているのかと思ったのだ。」

しかし、あれは真正銘の3つ子なのだ。私がひと言いってやれば済む話なのだが、例によってそれはできない。

デレ助は、なおも斜向かいの席にいる3つ子のことが信じられない様子で、サングラスをはずした。

「眩しくて、ほとんど瞼をあけていられなかった。それでも、慎也は眼を細めて、物珍しい女性3人組の姿を捉えようとした。今までずっとサングラスをかけていたせいなのか、なかなか明るさのギャップに慣れることができない。」

白玉団子氏の言うとおり、窓の向こう側は明るかった。時間が気になった私は、デレ助の腕時計を覗き込む。

ヒズミラクル10

6時3分。

もう夜明けというには遅すぎるほどの時間なのだから、窓の外が明るくても何ら不思議ではない。

「さきほどまで降っていた小雨は、いつの間にか止んでいた。それどころか、このファミレスの窓の外は、まるで真夏の昼間のように明るかった。空を見上げれば、光が満ち溢れていて、雲ひとつ見当たらない。それどころか青空ひとつ見当たらなかった。」

そう言い終えると、さきほどまで頼杖をついていた白玉団子氏が、唐突にソファから立ち上がり、大きなウィンドウガラスに向かってその場に佇んだ。

氏が言うとおり、空は　　というよりも、窓の向こう側は、光で満ち溢れていた。

ただし、それは陳腐な比喻表現としてや、希望もしくは平穩の暗喩として「光に満ち溢れている」のではなく、店内を囲むように設置されている四方のウィンドウガラス向こうの「風景」が、すべて光によって塗り潰されているという、文字通りの意味だった。

「慎也は、呆然となる。いきなり目の前が真っ白になったのだ。これをホワイトアウトというのだろうか。あいにく雪山で遭難したことがないから実際のところはわからない。ともかく慎也は、いま自分が瞼を閉じているのか開いているのか判断できなかった。立ちくらみを起こしたのかとも思ったが、そもそも、自分が立っているのか座っているのかもわからないほどに、慎也からは平衡感覚が失われていた。」

ちなみに、いま慎也はソファに座っているはずだ。なぜなのか、

さすがの私も目がくらんでしまい視界は芳しくない。しかし、眼がくらむ直前に、慎也とパピ子が座っているのを目にしているのだから間違いないと思う。私も慎也と同じで、自分が瞼を開けているのか閉じているのか判断できないでいる。

いったい、何が起こったというのか。

「膨大な光線によって視覚と平衡感覚を失ったのは、パピ子も同じだった。突然の出来事に正気を失いかけたものの、パピ子とはつさに隣へと腕を伸ばして、恋人の感触を確かめようとした。パピ子にとって『シンくん！』と何度も叫ぶ己自身の声が、正気を保つための唯一の助けになっていた。」

と、このように2人の心理を冷静に説明しているのは、もちろん白玉団子氏の声だった。

周囲からは、不特定多数の「わー」「きゃー」「おひよひよー」という叫び声が聴こえる。何の前触れもなく目の前が真っ白になったのだから、まあ無理もないだろう。

「しかし、無限大かと思われた窓外の光は、さっそく勢いを失いはじめていた。それは、なにか中心に向かって吸い込まれていくように見えた。あつという間に、店内からも光は去っていったが、まだ誰も、瞼を開けられる者はいなかった。」

しかし、白玉団子氏には全てお見通しのようなだった。突発的な出来事にも動揺することなく、きわめて落ち着いた様子で、淡々と状況説明を続けている。

私は、白玉団子氏の言葉を信じて「光が去った」という店内に向けて、閉じていた瞼をおそろおそろ見開いてみた。

「光源の出所を目で追えば、そこには太陽のようなものがあつた。ビルや数多の商業施設の合間を縫って、驚くほど低い場所に、きわめて強い光を放出している巨大な火球が、地上に伏したまま蠢いていた。それは

大音響。

何の音かというと、これはウィンドウガラスが破碎した音だった。3つ子A　たちが座っている窓際のガラスが、店内に向けて勢いよく飛び散ったのだ。

「6面のウィンドウガラスは、それぞれ、およそ100号絵画くらいの大きさがあった。それらが一瞬で粉々に碎け散り、その破片はおそらく音速に迫る勢いで、店内に向かって水平方向に吹き飛んだ。」

つまり、どういうことかと言えば、窓際に座っていた人々に、無数のガラス片が降り注いだ。

「その3人の女性は、みな同じ顔をしていた。たぶん3つ子なのだろう。一卵性多胎児というのは、容貌が似ているだけでなく、食事や服装の好み、ひいては普段の思考内容までが似通っていると言われる。しかし、たったいま降り注いだ微小なガラス片の突き刺さり具合は、3人ともがそれぞれ異なっていた。」

たとえば、一卵性双生児の弟が車にはねられて死んだとしても、それと同時に、まったく別の場所で、たとえば公衆便所で、用を足している兄が車にはねられ死ぬなどということは滅多に無い。白玉団子氏は、そういう意味のことを言いたいのだろう。

「まず、テーブルを軸にして手前に座っていた3つ子の一人　便宜上、3つ子の梅子と呼ぶ　の場合、ウィンドウガラスに背中を向けていたものだから、破片のほとんどは、着衣ごしにすべて背中や襟足のあたりに突き刺さっていた。痛覚は、正面よりも背面の方が鈍いという根拠のない印象があるので、おそらく、あまり痛みを感じなかったのではないかと思われる。その右手には、携帯電話を握りしめていた。」

他人の私生活を盗み撮りした「バチ」が当たったのだ。

私は、いい気味だと内心ほくそ笑みながら、引き続き、白玉団子氏の話に耳をかたむける。

「つぎに、3つ子の竹子と松子の場合、ウィンドウガラスに向かっ

て、ちょうど横つ面を向けていたものだから、当然、ガラスの破片は頬や耳朶などを標的にして突き刺さっていた。これは痛いに違いない。とくに竹子の場合、窓際に座っていたものだから、凶器と化した無数の不等辺多角形すなわちガラス片を、文字通り全身で受け止めるハメに陥っていた。あえて、この不等辺多角形に関して説明するならば、その「辺」の総和イコール「瀕死」という等式が成り立つかもしれない。」

とにかく、痛いどころの騒ぎではない。「頬」つまり「ほっぺ」とは、人間の身体の中なかでも、もっとも痛みを感じやすい箇所のひとつであり、だから全国のお母さん達は、子供が悪さをすると「ほっぺ」をつねるのだ。

元来、お母さんというのは、本能的に人間の弱点をよく知っていて、これまた本能的にそれを我が子や我が良人の教育にうまく利用しているというわけなのだが、それが夫の場合は「ほっぺ」ではなく、まあそんなことはどうでもよい。

きーーーーー

まるで、誰かがその両腕を左右めいっばいに広げて全速力で走り抜けていったかのような音だった。

何の予告もなしに、私は、とてつもない耳鳴りに襲われたのだ。

それはまるで、長い長い例えば全長2メートルほどの注射針を、ひと思いに勢い良く右耳の穴から左耳の穴へ突き通されたような、思わず叫ばないではいられないような、激しい痛みを伴うものだった。

「て　　か　　ら　　で　　っ
た。」

途切れながらも、白玉団子氏の朗読調が聴こえる。なおも耳鳴りが続いているせいで、氏が何を言っているのか、うまく聴き取ることができない。

きーーーーーん

ふと、3つ子たちの方に目をやれば、携帯電話を持っている3つ子Aが床に倒れていた。白眼を向いて、情けない表情のまま鼻血をたらしていた。その片割れである3つ子とは、ソファアの背中にもたれかかり、やはり眼球をでんぐり返して、ダラダラと鼻血やら鼻汁やら豚汁やらを垂れ流していた。どうやら、あらかじめ注文していた豚汁を口に含んでいた瞬間に、この災難に見舞われてしまったようだ。

不思議なことに、およそサクラの花ビラほどの無数のガラス片が突き刺さっている顔面や首筋の傷口からは、1滴の血も流れていなかった。まあ考えてもみれば刺さりたてホヤホヤなのだから、そういうものなのかもしれない。

「慎也は、祈るよ　　を閉じて震えていた。それは、隣でその腕を抱

パピ子にと　　頼りな　　あるが、幸いしていた。なぜなら、さきほどウィ　　ガラスの破片が飛散したこと　　パピ

左顔面は、まるでビツシリとガラスの鱗が生え　　有様になつて　　である。もし、ふたたびお互いが見つめあおう

ら、いままで2人の愛情を支えていた　　が音を　　壊れてしまつかもしれない。」

耳鳴りが微弱になり、聴覚が戻りつつあった。

相変わらず、人々の阿鼻叫喚が途切れることなく続いていた。

とりあえず生ビール

「パピ子が、溶けはじめている。」

そんな一言が、白玉団子氏の口から飛び出した。

よく意味がわからない。私の聞きまちがいだろつか。

例えば、アイスとか。

「アイス」と「パピ子」

共通するのは、始めの2音の母音だけだ。

「黒いマスカラが、線香花火のはかなさのごとく滴り落ちたかと思うと、すぐにパピ子の瞼が溶けはじめた。それから鼻が溶けはじめ、少ない鼻毛の生えている鼻腔内があらわになった。そのうち、頬の肉もトロトロと波打ちながら地面へと滴り落ちていき、やがてパピ子の瀟洒な頬骨が露わになった。当のパピ子自身は、まさに『とろけるチーズ』を演じているかのような気分を味わっていた。職業女優の面目躍如である。」

私は、その無惨とも酸鼻ともいえる有様から、思わず目をそむけてしまった。これは私の役割上、やってはいけないことだが、どうしても溶けはじめているパピ子の有様を直視することができなかった。

だが、せっかくそうやって目をそらした次の地点には、同じくトロトロと溶けている3つ子の姿があった。

まず、キューティクルが死滅していた。つまり、髪の毛が1本残らず焼け縮れていたのだ。

それから、とつくの昔に顔面の皮膚は溶け落ちていて、いつもなら眼球がある場所はお留守だった。2つの濁りきった眼球は、どこかへお出掛けしていた。という下らないことを言っている間にも、3つ子は溶け続けていた。もはや、首から上の部分は、骨格標本に近づきつつある。

「いつの間にかパピ子の衣服が消失していた。披露された美しき女優の裸身は、男性のニャンポコリンをギュルンギュルンにさせるのに十分すぎるものだった。しかし、大きな乳房やくびれた腰まわりに感嘆する暇も与えられないまま、一瞬にしてパピ子の骨格や内臓が剥きだしになっていく。もはやパピ子自身に、明瞭な意識は存在していない。走馬灯に明かりがともるまもなく、22歳の若き女優は、死を迎えた」

しかし、死を迎えてもなお、パピ子の肉体に対する損壊は続いていた。どんどん、ますます、ジャンジャンバリバリ、止むことなく人体組織の崩壊が続いていた。

「骨。というよりも、まるで和菓子の落雁のようだった。落雁は、ほのかに甘くて美味しい。まあそれはさておき、もっとわかりやすく言うならば、ラムネである。肉片がすべて剥がれ落ちてしまった『元・パペ子』は、まるでラムネ100%の骨格標本と化していた。ちよつとばかし削つて口に含むものなら崩れ去ってしまうほど、いまのパペ子は脆いの」

唐突に、白玉団子氏の声が途切れる。

それと同時に、ふたたび私の視界が光1色に塗り替えられた。まるで顔面に向かって太陽を投げつけられたような気分だった。

きーーーーーん

凄絶な耳鳴りは、あたかも濡れた服を乾かすためにそれを着たまま戦闘機のジェットエンジンの噴射口の間近に佇んでいるような気分だった。それでは余計わかりにくい。

しかし、よく考えてみれば、私が耳鳴りを起こすはずは無かった。この「きーーーーーん」という音は、私の耳鳴りではなく、ただ単に、私の周りで響いている大きな音に過ぎない。

なぜなら、私が耳鳴りを起こす事などありえないからで、だから、

私が耳鳴りを起こすことなど有り得なかった。

それと同じように、いま現在、膨大な光で目が眩んだように感じているのも、よくよく考えてみれば、私の勘違いだった。

いま目の前が真っ白なのは、単に私の周囲すべてに向けて強い光が発せられているからであり、それを私の肉眼がくまなく捉えている故からなのであって、ついっつかり私は自身の目が眩んでしまったのだと錯覚を起こしていた。

この私としたことが、ついその場の雰囲気にと釣られて、周りの者たちと同じような反応を示してしまうとは　まさに緊張感が足りないといしか言いようがない。

きーーーーーん

深い反省と慙愧の念をいだきながら、私は周囲の音に耳をそばだてるとともに、目を凝らした。

しかし、さきほどまで喧しかった人々の悲鳴や破碎音は、まるで聴こえてこなかった。あの格調高い白玉団子氏の朗読も、いつこうに聴こえてくる気配がない。

びぶおおおおおおおおおお

そんな中、唯一、私を感じることが出来たものは、強く吹きぬける風の気配だった。

ばびぶううううううううううう

わずかに音階を変えながら私を通り過ぎていく突風は、いつまでも止む様子がないくらいに、息が長い。

ひゅよおおおおおおおおおお

依然として、私の目の前は、気のせいではあるものの、まるで目が眩んだかのように、明るすぎる光の色で満ち満ちていた。何も見えない。正しくは、光しか見えない。

それは、あたかも開店前の銭湯の風呂場のごとく、私の周りには、誰もいなかった。いや、しかし、よく考えてみると開店前の銭湯の風呂場にはタイル掃除のアルバイトがいるかもしれないので、誰もいないことの喩えとしては、ふさわしくない。それに、たとえ開店前の銭湯の風呂場に誰もいなかったとしても、水を張った湯船があるし桶がある。これでは、何もないとはいえない。

では、遠い地の広大な砂漠地帯のごとく、誰も見当たらないし、何も無い、と言ってみる。確かに広大な砂漠地帯には、誰かが居る場所よりも、居ない場所の方がはるかに多いだろう。よって、誰もいないかもしれないが、やはり広大な砂漠地帯といえども、広大な分だけの砂粒がそこには存在する。つまり、何も無いことを表現する比喩としては、ふさわしいものではない。

視点を変えて、まだ何も注がれていないワイングラスの中身のように、誰もいないし、何も無い　よくある大きさのワイングラスの中に誰か人間が入ることは不可能なので、誰もいない比喩としては適切だと思われる。しかし、いやワイングラス自身があるではないか、という考え方についての私の意見を述べると、あくまでもワイングラスの中身について「何も無い」と言っているのだから、問題は無いだろう。だが、すこしだけ長く考えを巡らせてみれば、何も注がれていないワイングラスの中身には「埃」が無いとはいえないということに思いが至る。

かの無限に思える宇宙空間のごとく、誰もいないし、何もなかった　と言ってしまったあと、すぐに私は後悔した。まず、いま現在、この惑星の衛星軌道上の何らかの宇宙ステーション内で過酷な任務を遂行している各国の宇宙飛行士の方々に、遺憾の意を表するとともに、深くお詫びを申し上げたい。この私としたことが、勇敢

な彼・彼女らのことをすっかり失念していた。そもそも、宇宙空間を取り上げて、何もないということの比喩に利用しようなどという考えが間違っていた。そもそも我らを擁する水と緑の惑星は、宇宙空間が含有する何らかの成分の何らかの化学反応によって生じたのではないかと言われており、つまり宇宙空間を取り上げて「何もない」と言ってしまうことは、我らの発生および実在を否定することになるわけで、それは決して許されることのない誤謬だった。

すこし長い間、そんなことを考えていたのにもかかわらず、まだ私には何も見えない。つまり、周囲の光は去っていないかった。

私の肉眼で見届けられる果てまで全てが、一点の曇りもなく光によつて侵されていた。それは、つまり影のない世界であり、光と影が織り成す陰影によりカタチを保っていたはずのあらゆるモノが、その実体を失わざるをえなかった。

つまり、いくら周りを見渡しても、誰もいないし、何も無かった。私は何も見えないと言っているのは、そういうことだった。

そういうこと、と言うのは、どういうことかといえば、あたかも相撲部屋の横綱や大関や現役時代は小結どまりだった親方が食べ残したあとのちゃんこ鍋の中身のごとく、誰もいないし、何も無かった。

食べ残されたちゃんこ鍋には誰もいない。しかし、食べ残しのちゃんこ鍋といえども、煮くずれを起こしている野菜の切れ端や、あらゆる具材によつてもたらされた滋養豊かなスープが残っている。そんなものといえども、ご飯を放り込めば立派な雑炊になる。下っ端の弟子たちは、それを食べて厳しい修行時代を過ごすのだ。よつて、相撲部屋の幹部連中が食べ残したちゃんこ鍋を取り上げて、何も無い、とは言えなかった。

さきほどから、堂々めぐりをしている。

どうやら、私は、光によって隈なく蹂躪された現在の状況を、これ以上説明することができないかもしれない。

ところで、喉が渴いた。あくまでも気のせいなのだが、今までずっと休まずに語り続けていたのだから、気のせいといえども、やはり私の喉は渴いているのだと思う。

私のような物語の語り手というものは、四六時中喋りっぱなしなので、いつも喉がカラカラであるような気がしている。

いま思いおこせば、あの公園に立ち寄ったのも、水飲み場の匂いに誘われてのことだった。私は、私をずっと苦しめている気がしていた喉の渴きを何とかしようと、さまよい続けていたのだ。

この喉の渴きのような気がするものを癒せるのであれば、公共水道とはいわずに、道路の水溜りに這いつくばっても良いし、それが許されないのであれば、野良犬の小便をありがたく頂戴するというのも構わないが、どれだけ卑屈になろうとも、喉の渴きのような気がするものを癒すことは叶わなかった。

いったん喉が渴いたような気がしてしまうと、それにつられて腹がへって来たような気もしてきた。風呂に入りたい気もする。たまには、どこかへ旅行に行きたい気もする。自家用車が欲しい気もするし、オシャレを試してみたい気もする。でも、やっぱり私は喉の渴きのような気がするものを癒したい。

とりあえず生ビール。言ってみただけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1767b/>

虚構ヒズミラクル

2010年10月8日11時49分発行